

誘惑多い
夏休み



最近では錠剤型合成麻薬も取引され、薬物乱用が低年齢化しています。

薬害 非行を 防ぐ

夏休みの解放感から生活リズムが崩れると非行にも走りやすくなります。福岡県はシンナー乱用で検挙された青少年の数が、7年連続全国ワースト1位。子どもたちに、いつ薬物の手が伸びてもおかしくない、危険な状況です。

辛田征二さんに学ぶ シンナー乱用の恐怖

ま、薬物を乱用し依存症にまで陥る子が増え続けています。中でもシンナーは入手しやすく、高校生に最も乱用される薬物です。幻覚を起こし、脳や神経細胞を死滅させ、歯を溶かして骨までむしばんでいきます。かつてシンナーに溺れ、18歳の秋、一夜にして視力を失った佐賀県立盲学校教諭の辛田征二さんは、薬物の恐さを一人でも多くの人に知ってほしいと講演活動を続けています。7月10日に赤池中学校で行われた薬物乱用防止講演会でお話から、辛田征二さんの体験を通して、シンナーの恐怖について考えてみましょう。



↓赤池中主催で全校生徒を対象に行われた薬物乱用防止講演会

シンナー乱用の恐怖

シンナーは本来、塗料や接着剤などをとくすために使用されています。シンナーの蒸気を吸い込むと、肺から血液の中に入り、全身をまわります。特にシンナーは脳に集まる性質があり、脳の神経細胞を殺し、脳を委縮させます。



シンナーが体にもたらす影響には、次のようなものがあります。「意識障害」「記憶力低下」「幻覚」「妄想」「失明」「歯がボロボロになる」「気管支や肺粘膜がおかされる」「肝臓細胞の一部が死ぬ」「食道や胃の出血」「赤血球がつかられなくなる」「生殖器が委縮する」「手足のふるえ」「麻痺」など。



【辛田征二さん】佐賀県立盲学校理療科教諭。14歳冬からのシンナー乱用により、18歳で視力を失う。その苦しい経験から、薬害の恐ろしさを伝えるため、精力的に講演活動を行っている。佐賀市在住、38歳。

わたしは、昭和62年11月1日に失明しましたが、もし、その前日にシンナーをやめていたら、今も目が見えていたでしょう。シンナーの怖さは、障害が

も大切な2人の息子の顔もわからず、佐賀市の盲学校に入り、現状を受け入れるまで3年かかりました。やっと22歳のころから

「視神経が死んでいます」と宣告されました。何の前ぶれもない、いきなりの失明でした。視力が回復しない事を知り、一時的なものだと信じていたわたしは、事の重大さに震えました。将来の不安におびえながら、絶望と後悔につつまれ、家の中で暴れる毎日。何の役にも立たず、存在価値もない。生きていてもただ邪魔なだけ。死のうしろでも死ねませんでした。

「視神経が死んでいます」と宣告されました。何の前ぶれもない、いきなりの失明でした。視力が回復しない事を知り、一時的なものだと信じていたわたしは、事の重大さに震えました。将来の不安におびえながら、絶望と後悔につつまれ、家の中で暴れる毎日。何の役にも立たず、存在価値もない。生きていてもただ邪魔なだけ。死のうしろでも死ねませんでした。

わたしは光を失った翌春から、佐賀市の盲学校に入り、現状を受け入れるまで3年かかりました。やっと22歳のころから

「視神経が死んでいます」と宣告されました。何の前ぶれもない、いきなりの失明でした。視力が回復しない事を知り、一時的なものだと信じていたわたしは、事の重大さに震えました。将来の不安におびえながら、絶望と後悔につつまれ、家の中で暴れる毎日。何の役にも立たず、存在価値もない。生きていてもただ邪魔なだけ。死のうしろでも死ねませんでした。

なる好奇心からで、害があることなど知りませんでした。仲間にも勧められ、初めてシンナーを吸ったのは中学2年生の時。今でも覚えています。とにかく痛かったのですが、しばらくすると、頭がボーッとしてきました。やがて身体がしびれ、部屋が動き出し、壁に絵や文字が浮かんだり幻覚が起きました。わたしはこうして快樂の世界にのめり込み、数日後にはシンナーを積極的に求めるようになったのです。

「ある日、いつものように一人でシンナーを吸っていると、死の恐怖を感じるほどの吐き気と息苦しさ、脱力感に襲われました。少しでも動く息が止まりそうでした。親が帰宅後、すぐに病院に連れられ、応急処置で呼吸が楽になってから、そのまま眠りにつきました。その日が光を見る最後の日になるうとは夢にも思いませんでした。」

「意識が変わり、普通科を卒業後あん摩・鍼灸を学べる専攻の理療科に進学。実習では「お陰で軽くなったよ」と患者さんから感謝の言葉をいただいた。自分も少しは人の役に立つかもしれないと、生きる望みを感じました。その後、先生から盲学校の教師になることを勧められました。最初は戸惑いましたが、やがて「自分のような生徒に、鍼灸を通して生きる希望を与えたい」と思うようになりました。教員になる決意をしたわたしは、3年間の理療科卒業時に、

目を開けると真つ暗だった。私はシンナーで視力を失った。

「視神経が死んでいます」と宣告されました。何の前ぶれもない、いきなりの失明でした。視力が回復しない事を知り、一時的なものだと信じていたわたしは、事の重大さに震えました。将来の不安におびえながら、絶望と後悔につつまれ、家の中で暴れる毎日。何の役にも立たず、存在価値もない。生きていてもただ邪魔なだけ。死のうしろでも死ねませんでした。

わたしは光を失った翌春から、佐賀市の盲学校に入り、現状を受け入れるまで3年かかりました。やっと22歳のころから

「視神経が死んでいます」と宣告されました。何の前ぶれもない、いきなりの失明でした。視力が回復しない事を知り、一時的なものだと信じていたわたしは、事の重大さに震えました。将来の不安におびえながら、絶望と後悔につつまれ、家の中で暴れる毎日。何の役にも立たず、存在価値もない。生きていてもただ邪魔なだけ。死のうしろでも死ねませんでした。



見逃さないで 子どもの SOS
子どもがトラブルに直面したときや悩みを抱えているときには必ず何かの変化があるはずだ。「学校に行きたがらない」「持ち物がなくなったり、こわされたりする」「友人がかわるいなくなる」「口数が少なくなり、学校や友人のことを話さなくなる」「表情が暗くなり、オドオドする」などです。また、薬物乱用時に現れやすいサインとして「夜中に外出したり、外泊が多くなる」「金遣いが荒くなる」「極端にやせる」「怒りっぽくなる」「手が震える」などがあります。このような子どもの SOS を見落とさないようにしてください。



言葉巧みな誘惑 薬物乱用のきっかけは友人や先輩、恋人などから「一度くらい使ってみたら大丈夫」などという誘いと自らの好奇心がほとんど。しかし、一度でも使用すれば、刺激と快感が脳に記憶され、必ずもう一度使いたいという強い欲望と生戦わなければなりません。薬物の依存性は、アルコールやタバコとは問題にならないくらい強力です。「ダイエットにいい」「嫌なことを忘れる」「合わないければその時やめればいい」と、人は言葉巧みに近づいてきます。しかし、ドラッグが切れば、その何倍もの苦しい症状が返ってきます。快感を味わった後は、地獄が待っているのです。